

日蓮大聖人御書全集

おおいのしようじにゅうどうごしよ

大井莊司入道御書

新版  
1822

1823

おおいのしょうじにゅうどうじしょ

# 大井莊司入道御書

けんじ

ねん

がつ

きい

おおいのしょうじにゅうどう

建治 2年 ('76) 2月

55歳

大井莊司入道

柿三本・酢一桶・くくたち・土筆、給び候い畢わんぬ。

唐土に天台山という山に、竜門と申して百丈の滝あり。

この滝の麓に、春の初めより、登らんとして多くの魚集

まれり。千万に一も登ることを得れば竜となる。魚、竜と

成らんと願うこと、民の昇殿を望むがごとく、貧なるもの

の財を求むるがごとし。仏に成ることも、またかくのご

とし。

彼の滝は百丈、早きこと、強兵の天より箭を射徹すよ  
り早し。この滝へ魚登らんとすれば、人集まつて羅網をかけ、  
釣をたれ、弓をもつて射る。左右の辺に間なし。空には  
鷲・鷦・鷯・鳥、夜は虎・狼・狐・狸、何となく集ま  
つて食い噬む。仏になるをも、これをもつて知んぬべし。  
「有情は生死の六道を輪廻す」と申して、我らが天竺に  
おいて師子と生まれ、漢土・日本において虎・狼・野干と  
生まれ、天には鷲・鷦・鷯、地には鹿・蛇と生まれしこと数を  
しらず。あるいは鷹の前の雉、猫の前の鼠と生まれ、生き

こうべ

突

肉

齒

かず

知

ながら頭をつつきししむらをかまれしこと数をしらず。  
一劫が間の身の骨は、須弥山よりも高く、大地よりも厚か  
るべし。惜しき身なれども、云うに甲斐なく奪われてこそ  
候いけれ。

しかれば、今度、法華経のために身を捨て命をも奪われ  
奉れば、無量無数劫の間の思い出なるべしと思ひ切り給  
うべし。あなかしこ、あなかしこ。またまた申すべし。恐々  
謹言。

けんじにねんひのえね

にちれん かおう

建治二年丙子

きんげん

おおいのしょうじにゅうどうどの  
大井莊司入道殿